

叢 桂 亭 医 事 小 言 卷 之 一

原 南 陽 先 生 口 授

門 人 水 戸 大 河 内 政 存 筆 記

常 北 丹 彝 校 正

医 学

医の学び難きことは、儒学と違い正典の無き故にて、世々の医師、其の見る所に依って己々の見解を以て道理を推して薬験を試みて、是にて違いなきと思う所を説き出す故に、多端になり、後学の者は何れに適従することを知らず。また何れの書も方薬を取りて用いるに一つ二つは異験あるものなれば、文盲の人は書に載りたるほどなれば、これに極めて他を顧みるに及ばずと思て^{はげ}励まざるに至る。畢竟徴を取るの書なければなり。

『内経』・『難経』は古書なれば徴を取るべきものなれども、是又聖經と違い後人の作を雑えて五行に陥り、治療の際に至りては却って害になることも多し。然れども内経は古書なれば要語各所に散在す。故に悉く読まねばならず、また悉く取ることならず。

程子の説に、此の書戦国の間に成れりと云うは、大儒の見にてさも有るべし。また『淮南子』と同作ならんと『七修類稿』に見ゆ。また徂徠先生の『素問評』には各篇に文章の違いあることを評せり。此の如くなれば一人の作にては無きと見えたり。

愚按ずるに、家語（『孔子家語』）の文にも似たる所多し。また三、四部を集めて素問内

経と名づけたりと云う説もあり。『史記』の倉公伝に、「公乗陽慶、尽く黄帝・扁鵲の書を収めて淳于意に伝う。是脈書。上下経。五色診。奇咳術。揆度陰陽外変。薬論は石神接陰陽禁書なり」とあり。また「受読んで之を解験すること一年ばかりなるべし」と云うにて見れば、今の『素問』『靈枢』の事ならんと云う説もあり。

また後漢の鍼医、郭玉が師を程高と云う。程高が師を涪翁と云う。涪翁は其の出る所を知らず。常に涪水に釣りするに因って涪翁と号して、其の術、世に称せらる。鍼経・診脈法を著して世に伝う。疑うらくは今の素霊・難経の書は涪翁の著する所ならんと云う説もあり。つまる処が明徴なきことにて其の人々の見なり。何れにしても一部中に一理に成り難き所ありて、是を註するに同意にせんとするは不案内なる事なるべし。

『難経』は一人の作にて、是も古書なれども、全く今の『素問』を読みたる人にて無きと思ふ所あり。『難経』を療治本なりと云う古説あれども、今古学力の異なるにや。

さて此の如き事は鹿門先生の『医官玄稿』に論じて詳らかなり。医書の考は『医官玄稿』みて知るべし。また近ごろ桂山先生の『素問解題』に家々の説を具せり。黄帝岐伯の自作のように覚えたる目にては、古今論弁しても、盲者の五彩に於ける齊し。方薬は素難二書に出でざれば、今の治療には其の道理を弁るのみなり。

方薬は仲景氏の『傷寒論』に出たるを医方の鼻祖とす。仲景氏の事跡、並びに傷寒の名義のことは先に著す所の『叢桂偶記』に詳らかに載せたり。蓋し仲景の組み立てられたる方なるや、また後漢の頃まで通用したる古方なるや、其の徴する所無ければ仲景方と唱える外に云うべき言葉なし。ややもすれば古方は今の人に宜しからず、と云うことを以て口実となし、権貴の後庭、或いは富饒の人を惑わす。一体病にも古今無く、人身にも古今の相違なし。

世人或いは言う、古人は質朴にて寡欲なり、故に肌膚五内も厚しと。是また古今のわけには非ず。古より天地に変わりなければ天地の間に生育する人間に違いあるべき理なし。若し違ふとならば、天地の間に生産する薬石草木も其の性柔らかに成りて、人間とよきほどに釣り合うべきの理なり。豈に夫れ人間ばかり天地古今の違いあらんや。今を以て見るに、市民は奸巧（原文は女へんに虽、意味によって改める）れば風俗によりて古今によらず。病に至りては風土異なれば病を異にす。是れまた古今の違いたるに非ず。淳朴の民は五内厚きに非ず。奸巧とて脾胃薄弱に非ず。厚薄は稟賦に在りて、山民必ず壽ならず、市民必ず夭せず。余嘗て『医訓』と云う文を書きて是を論じたりき。

さて『傷寒論』も全書にあらざること、先輩往々是を論ずる通り、闕文・錯簡多くありて、王叔和（鄭樵が通史氏族略に曰く、周の王叔虎之裔なり。王叔を以て姓と為し、此

れに因って之を觀れば王叔は複姓なり）撰次を経て今に伝うと雖も、王叔和の文も本文に誤入して、今の本は王叔和の撰次せられたる時の本とも違ふなり。然しながら、此れ傷寒論に熟せざれば湯藥の始まる所を知る事能わず。古今の方の変化を見分けることもならず。よって余が門にて初学の童子には、先ず『傷寒論』を暗記さするなり。治療は傷寒こそ治し難し。表裏の証あればなり。此の病を理解すれば、其の他は准じて治療成るべし。また傷寒は証を以て之を治するものなれば、方証相適することを貴ぶなり。譬えば詩を作り歌を読むより、連歌俳諧に至るまで古人の句を広く覚えて居る故に、自己の句は胸中より出れども、古人の句を覚えてる力を以て佳句の出ると同前にて、胸中に種のなき人にては句弱くて下手なるものなり。

医療も其の通りにて方証のこと胸中に無ければ下手なる道理なり。『傷寒論』に熟したる人は仲景の風にもつき、『万病回春』に熟したる人は龔廷賢の様にもつき。則ち唐を学べば唐詩に似、宋を好めば宋風に出来る。其の格調は人々異なれども、平仄・韻字は違わず。詩は詩なり。此の理と医療も同味なり。然るときに初心の人、回春（『万病回春』）などによれば、桂枝麻黄の所へ參蘇飲・敗毒散と処劑すれば、唐と宋との風に違いたるばかりなれども、見えもせぬ所に工夫が附いて、新婚、或いは妾の多きを見れば水蔵不足を兼ねたりと思ひ、劇職いそがしきの人を見ては氣虚を帯びたりと、邪毒盛んにして脇目も振ることならぬ最中に他証の方を投ず。凡そ百の事、両端を持して宜き事無きにて知るべし。是を以て初心には『傷寒論』より学ぶばするは表裏の規則を知るのためなり。眼前の敵を敗れば民の塗炭とたんなんぎに仕方の有る道理なり。先ず傷寒を治して腎虚・氣虚は後に治すべきなり。是にて平仄の違わぬ療治なる所なり。然れば回春を読むは悪しきかと思えば、五宝散など云う神方は多くの先達回春より取り用いるを以て、回春も読まねばならぬことは知るべし。

鍼灸は病によりて湯藥より奇驗の有るもの故に常に学び置くべし。譬えば卒倒・驚風などは灸の力を第一とす。別て小児に異驗あり。其の妙、一々に説きがたし。

さて治療の際に臨みては、経絡に拘らずして新作意おもいつきにて鍼灸しても効をとることも有るべけれども、其の法を了解して後には新作意にて灸も鍼もなるべし。先ず其の法は『甲乙のみこみ經』にて学ぶべし。古書なればなり。何故にや我が医道は古書より学ばずに末書より教えるにや。是先にも云う、正典の無き故に十四經・大成論・格致餘論などを先に読ませて、下手になれなれと仕込むなり。古を学ぶを学者の要とす。儒の四書五經を教える、則ち其の法なり。古書は是より古書なるは無し。終えて左国史漢（『春秋左氏伝』、『国語』、『史記』、『漢書』）或いは老莊列（『老子』、『莊子』、『列子』）などと次第す。其の後には末書も思い思いに学ぶ。見識是に開けて修身の業成る。之を大いにしては治国平天下なり。是稽古と

俗に習う事に唱える通り、古よりするを学者の法とするに、経絡は十四経によるは如何なる事にや。『甲乙経』は『素問』の考になる書なり。『医官玄稿』を読んで知るべし。

愈穴は余が著す所の『経穴彙解』にて学ぶべし。銅人形にて学んでは悪しし。古書は皆頭面・腹背・手足にて穴処を分けたり。十四経行なわれてより各経にて分けるなり。経を以て分けたるは『外台秘要』に創まり、奇穴の任督に脈を加えて、十二経を十四経にしたるが滑伯仁が作意なり。夫れ愈穴は人身の骨隙・陷罅・分肉宛々たるを尋ねて之を知るなり。必ず分寸に拘らず、皆骨空・分肉に求む故に、銅人形にては方角ばかりを知るのみにて、治療に至りて実地にかからず。分寸は其の大概に備う。詳らかに『経穴彙解』に備論せり。

四診と云うは医家、病を治するの大綱にて、是を捨てては何れにも療治することならず。四診は望・聞・問・切なり。望とは病者の顔色・^{こゑやせ}肥瘦・盛衰等を望む。聞とは苦痛するや、五音や咳嗽するや等を聞く。問とは苦しむ所、飲食の多少、二便の利・不利、病前よりの事、病者の問わざれば言わざる所を問う。以上にて病証・病因を識りて之を詳らかにして、其の後に脈を診する。是を切と云うなり。そこで病の軽重・安危を知る。^{よつ}仍て病名をもうく。脈を切にするは吉凶・安危のほどを知り、治と不治とを知るの用にて、脈にて病を知ることの用には非ず。

譬えば咳嗽寒熱を患える人あり、此の証は是^{まい}勞瘵になるべき病体なり。此れにて脈を切にするに、其の人の脈細数なれば難治とす。脈浮数にてあらば発汗して治すべしとす。是勞瘵には非ざる故なり。乃ち切の所にて定むるなり。脈にて病証を知るものと思ひては悪しし。吉凶・安危を知ると云う所か。至って容易に知るべきものに非ず。此れに苦心すること多年、^{かきね}仍て腹診を参伍して診脈の助けとすべし。腹診も意を留めざれば知れがたきものなり。

死生命有り、と云うは聖人の語にてあれども、其の命の来るや来らざるやは誰人にても知れず。また命数かぎり有るものならば、病とも安然として居るに極めて宜しからんに、飲み難き薬を飲んで病を治するを以て見れば、治せば生き、治せざれば死の理なり。天命常なしと云うものにて、不養生・不用心なれば天命を終えること能わずして半途に死す。其の死するにまた稟賦薄弱にて老壯に至ることのならぬ人もあり、是等を天命と云うべきなり。人の病する時に、是は治すと治せざると預め知りて療を施すを医と云うべし。治すか治せざるかを問わず、此の証をば此の薬にて治すべしとばかりにては、薬を飲むは医者を頼むに及ばず。書籍にあるまを薬店より取り寄せて飲むと齊しからん。夫れ医緩の晋侯を診するも、扁鵲の號の太子を診するも、皆預め死生を知る。是^{いにしえ}古名医の行なう所にて、今に至りて医たるもの、^{いっしんふらん}沉思精度にて学び習うべきの手本なり。

さて死生を云えば二つなれども得と味わえると一つなり。死なれども生なれども、はつきりと片々知れば夫れにてよし。死すと知れば生の理なく、生と知れば死の理なし。死生を詳らかに知て人命を療ずべし。其の死生を知るは脈より知りやすきは無し。さて脈ほど知りがたきは無し。故に望・聞・問・切と腹診を参伍して是を定む。死生さえ明らかに知れば天下に畏るる所なし、鬼神をも哭なかつせしむべし。

余が学ぶ所は方に古今無し、其の驗あるものを用ゆ。されども方は狭く使用することを貴ぶ。約ならざれば薬種も多品になる。華佗は方、数種に過ぎずと云うは、上手にて面白きことを味わえ知るべし。其の源を取りて病を理解せば、一方にて数病を治すべし。褚澄（『褚氏遺書』）の「善く薬を用ゆる者は、姜に桂の効あり」と云いしも此の理なり。何ほど奇驗の神方にてても用ゆる場悪しければ寸効なし。偏に運用にあり。広く方を尋ねると繁雑になりて悪しけれども、博く方法を学んで、是を約にするを第一の学問とす。用ゆる場よければ生姜が肉桂ほどな驗をなすとは、能々解了すれば将棋の如し。上手の指す駒も下手の指す駒も、其のききようは変わらず。同じように動かすうちに、歩兵は金銀よりも働きをなす。則ち此の理なり。下手のつけた桂枝湯も上手のつけた桂枝湯も同じ方なれども、下手なれば、つけた所ばかりなり。上手のつけたる方は、外の所に響きを以て、誰も同じくするように見える中に効を取るなり。

世に古方家なるもの出てより、医の眼目を開き、今は人々仲景氏の方を使用することを知る。偏に古方家の功なり。

名古屋玄医と云し人は丹水子と号して、至りて功者の大家なりけるとなり。『医方問余』『難経註疏』と云う書を著し、附子を多く使用する療治にて、痢病に逆挽湯とて天下に広く通用する方は、此の丹水子の方なり。此の一事にてても其の功しるべし。『弁証録』にも大瀉門に逆挽湯と云う方を出せり、此れと同名異方なり（其の方、人参一両 茯苓二両 大黄一両 黄連三錢 梔子三錢 甘草二錢 水煎服一劑。腹痛除き、瀉もまた頓に止む。此の方、人参を用いるは、以て其の脾胃の気を固め、則ち氣、驟脱しゅうだつ（にわかになれ出る）に至らず。然るに最奇は大黄を用いるに在るなり。○丹水子の逆挽湯は桂枝人参湯に茯苓、枳殻を加う）。

少しく仲景を用ゆるの意ありと云う時に、後藤艮山先生は佐一と称す。後藤又兵衛が末の由なり。先生弱冠より心中に日本にて第一の座に居て第二に続けざる、上座のことをなさずば生まれても甲斐無しと思慮するうちに、其の中、仁齋文学の名、海内に溢れる。此の上に立ちがたし。僧は戒行にて世に勝れんも安かるべけれども、深草の元政を其の頃、

如来の再生と人いえば其の上に座しがたし。医は今其の人無きことに人を救う術なりとて、丹水子の門に入って丹水子に学ばんと、鳥目一貫文を携え束脩（入門の謝礼）となして、入門せん事を乞う時に、都講（塾頭のこと）其の常式に協わざるとて其の入門を許さず。佐一大いに怒って一貫文を地に投げ、「押付け此の門を傾けて見せん」と言い捨て去りにけると。後に苦学独立して古方家の元祖と仰がれたり。先生治療を初められしときより、沈痾・癆疾、世医の難治として捨て置きたる者の治したるを見て、有志の輩一時に競争して門下に馳せ加う。故に高名の門人多し。其の書は『病因考』『師説筆記』あり。また『傷寒約言』『艾灸通説』など云う書、家に出て子孫に人物乏しからず。

さて後藤の門人に数輩の豪傑を出せり。其の一人は山脇道作東洋先生と号す。『外台秘要』を刻し、『蔵志』『養寿院医則』を著す。中風を熱癰瘡を云う所より考えて、多く石膏を使用す。また一人は香川太仲秀庵先生と号すれども、堂号世に高く聞こえて一本堂と称す。『一本堂薬選』『一本堂行余医言』『医事説約』の著あり。艾灸を以て多くの沈痾を療ず。また一人は松原圭介と云い、此の人はさせる著述も無きにや、経験の家方を記したる書のみを見たり。其の門人に吉益周介東洞先生と号する人出て大いに高論を吐き、『建殊録』『薬徴』『方極』『類聚方』等の書を著す。今世に古方と云えば吉益流のようになりたるは、全く吉益の豪傑によれり。別けて下剤を好む療風なり。此の頃京師古方大に行なわれて、四方の書生競い学んで海内の療治の風、ここに一変す。世に四大家と云うは後藤・山脇・香川・吉益の四流を指す。其の意趣家々に異なり。

山脇の門人に永富鳳介と云う人出て、赤馬関獨嘯庵と号す。京師の俚言に、人の心のままに任せずもとれる人を広く指して毒性と呼ぶ。蓋し其の唱の同じきを以て此の如くは号せりや。此の人、越前にて奥村良筑と云う人に従って吐法を受けて、上京し東洋先生に語れば、先生大いに嘉し、嫡子東門先生を遥かに越前へ下し吐方を学ばしむ。良筑教えて曰く「吾子（あなた）こそ吐すべき証候具せり」と云うより徒に上京して東洋先生に其の候を告げ、また越前に下向して吐薬を試みたり。

本邦にて上古は知らず、吐流は此の良筑翁より創たり。一代の内に一人も薬を乞うもの無く、絶したること両度ありとされども、泰然として吐を以て名医と呼ばれる事、其の人物を思うべし。独嘯庵、活達雅量にして、『吐方考』『漫遊雑記』を著す。書中に人意の表に出たる所多し。山脇の塾に居る時、三条橋上に酔臥して奉行所より通達ありて引き取ることありと、其の任誕なること斯の如し。然れども書生を励まし、人才多く出来したりとぞ。上の著述を読まずんばあるべからず。

凡そ人の平生無事の常体は一身の陽気は外へ疎通するものにて、其の気閉塞し、内壅したる所の出来したるが病の起こる所なり。少しの滞にても閉塞して通暢せず、夫れを順行

するように療治するを医薬と云う。夫れ人の毛孔九竅はみな発泄もれるの具なり。其の大なるは口鼻二陰なり。呼吸を止むれば死し、二便閉れば病むは人皆是を知ると雖も、周身ともに疎通を以て無事に居ると云うことは弁じかねる人多し。冬天清朗なる時に人の日向に在るを見れば、気の上に昇る影見ゆる。是は皆毛髮の孔より疏するなり。一身陽気外へ張りてあれば、寒暑・風湿ともうけず、睡眠するときは陽気張らずして沈む故に、衣被を発開すれば病を受ける。仮寝うたたねすれば少しの間に風を引く。酒の醒際さめまわに外感するも、荒業あらわざ力作して裸になりて騒ぐ中は、陽気大いに表へ張る故に風寒も知らず、休息する時に俄に風を引く、即ちこの理なり。また空腹なれば周身の気張らず。故に外感するも同理なり。気張ると張らざるとにて諸外感皆ここに起こるなり。

さて邪を受ければ毛孔閉ずる故、気は表へ通せんとして出ることならず。故に周身皮膚の泄する所を尋ぬる時に、気升降してゾクゾクと悪寒す。其の時に毛孔へ泄れ出んとすれども、閉じてある故に張れあがりて粟起す。是を鳥肌と云う。発汗すれば外へ通暢する故外邪去るの理なり。この処を解しそこねて日に移せば、陽気外へ泄らすことならぬ故に内に鬱す。外に泄れて出ることならぬと極めれば、升降して出路を争うの気止む。其の時に悪寒去りて熱ばかりと成る。ここが表症なきと云う場なり。夫れ故、往来寒熱は半表半裏と云うにて、外に達せんと云う気の猶残りてあるうちなり。胃中猶陽気を外へ敷くことの勢い有る故なり。また壮年の人、天井の低き所に長座し、或いは頭巾笠など着ては昇る気を押さえる故に鬱して煩わしくなることあり。湯気のがるも同じなり。兎角疎通せねば陽気閉じて鬱する故に熱になる。是発熱するの訳わけなり。

さて其の陽と云うは何処より出来るものなれば、胃より出づると見ゆ。水穀胃に入って陽気を造り出すことかぎり無く止むとき無し。是を表へ通ずるが平生無事の姿なり。陰症となれば表を閉じたる邪気、次第に深く入って困む故に、胃より造り出す陽気の通ずる所の分内せまくなりて、陽気も次第に屈伏して一身へ敷く所に至らず。そこで一身の端々へは一向にとどき合わぬ所が、手足逆冷、鼻尖も冷えるなり。是手足まで陽気のとどかぬ故なり。附子を用いて胃気を助ける意味知るべきなり。

また腫物を発せんとして寒熱するも、周身の気通暢せざる処の出来たる故に陽気鬱して熱するなり。また疔発などと云うは何事もなく卒倒するの後に疔を発す。項強背強にて卒倒するもの、俗に早打肩と云う類、早く血を去れば活す。是鬱結を疏したる故に陽気発泄して癒ゆるなり。とかく疏通のよきは無事の時なり。

盛壮の人、紙子かみこ(和紙で出来た着物。軽く風を通さず暖かい)を着すれば鬱冒・昏眩するの類、皆推して知るべし。平人、常体を知って後、病体を考え知るべし。気は此の如く泄するを以て無形なり。凡そ飲食胃に入れば精気化して気となる。是乃ち人身の陽気にて

即ち元気と云うものなり。此の陽気を造り出すこと胃の役にて量なく造り出す。其の造り出す陽気を通暢して運動するが人身の常体なり。皆胃の役なり。故に食を絶すれば死するは、胃氣尽きて件の氣を造ることならぬ故なり。呼吸の氣、二便の利、皆胃より敷く所なり。故に胃氣尽きれば陽氣尽きるの理なり。

一士人昏倒して縁より墮ちて、庭石にて額と唇を打ち破る。抱き挙げるに、本心なきにはあらねども、はっきりとはなし。脈伏して絶したるにあらず。先ず三黄湯を与えるに、二度飲むと今はよほど快しと云うや否や、疵つきたる所より血を流す。閉じる所あれば血の出ざるのみならず氣の発泄せざる故に昏倒したるならん。味わって解すべし。

天地陰陽の道、生育を以て大なりとす。故に産婦の治法を知るを專要とすべし。孫思邈、『千金方』に婦人科を始めに設けるは此の意なり。生育のことは天地自然の事にて病に非ず。人事の入るべきことには非ざれども、難産に至りては病にて、其の法を得ざれば死す。皆是養護宜しきを失し、或いは多欲にて胎を偏に成し、執作度^{はたらま}を失い、仆撲^{こころぶ}・躓倒などにて横産するも有り。鳥獸は交わるに時あり、人は交わるに度無し。犬猫の類、已に胎を受ければ再び牡を近づけず、其の上卵生・被膜生は四肢の支えなき故に難産無し。また多欲なれば産後血熱多く血暈などし、此の血熱日を経て解せざる。或いは風冷などに侵されて咳嗽を加へ、終いに勞瘵^{じよくろう}の状に至るものを^{なら}勞と名づけ難治とす。

其の倒逆生は自然に受胎の事にて、順産になすの術なし。子がえりと云うは虚妄の説なり。是は産前腹候して順逆は予め知るべきなり。

子玄子の腹候せらるるを見たるに百中なり。胎の腹内にある形を明に解すれば見外しの無きはずなり。子玄子一たび出で、千古の惑いを解して、天下初めて産乳の理を知ることを得たり。人事の大要、是を学ぶには、『産論』^{なら}並びに『産論翼』の二書なり。手術二十二ありて、回生・鉤胞の二術に至りては筆墨に明にすること能わず。故に『産論翼』にも此の二術を載せざるは禁秘したるのみに非ず、未熟にて人を誤り害をなすことを恐れる。此の二術を知らずんば死を起こすことならず。

子玄子は『産論』に小伝あり、その神奇の事は今賛するに及ばず。其の術の始めを語るるを聞くに、この時より此の事を考えつけて、此の術は始めたり。一々に奇異なること人意の表に出ず。只文字の無き人故に其の事皆俗事より発すれども、暗に紅毛^{オランダ}の説に符合するは、天の告げるに子玄子を以てせるか。其の頃は紅毛学、今のように行なわれざる時なり。また常に語らく（いえらく）、往時は寒糞^{びんぼう}にて古銅・鉄器を買いて生とす。殆ど窮せり。よって按摩を取り世を渡るに隣店に難産あり。急に作意にて術を設けて之を救う。是を斯道（この道）の始めとす。四十餘歳の時なりと。夫れより十四、五年の間に天下に

名を振るい、一家の祖と仰がれたり。其の時より一貫町に住せり故に、また他に移るべからずとて、其の処に隠居す。

性任侠なることは東門の序文に見ゆ。極めて世の物体なる（不要に重々しくもったいをつけるさま）を悪む。或る時、一富商の婦、産後血暈して数名医を迎えるに甦きめず、雪中に子玄子を延まねくにより、常には紫の被風を着しはなし、目貫の短刀にて駕籠にて出られけるが、其の日には銀拵えの太刀作朱鞆の大小を帯し草鞋をはき其の門に至れば、幾つも駕籠をならべ供も大勢居たり。やがて玄関にしりうたげし（腰掛て）高く呼びて「湯を一つくれられよ、足を洗いたし。上工の医者は駕籠には乗れども治法は知らず。賀川玄悦は草鞋わらじに乗りて来れども、指が一本ちょっとさわれば立ちどころに治す」と満座の時師（有名な医師）の並居るところを思うままに冗言すれども一言の返答するものなし。産室に入って禁暈術を行い房より出て「各おのおの御大儀、暈をは玄悦療じてござる。是からは各の手に宜しきほどなるべし、今より帰らんと欲す。夫れともまた悪くしたらば早く迎えをつかわされよ」と玄関の真ん中にて草鞋をはき、傍若無人なること皆此の類なり。

九、十月頃、毎朝袖なし羽織無刀にて藜杖をつき、島原へ出る迄の貧民の籬落の間を閑行す。児童未だ寒衣を着ずに街頭に遊戯するを見て、六条へ人を遣わし綿衣を幾つも求め、件の児童に着せて廻る。是をたのしみとす。また宅の向かいの寺門に野乞食居る。寒中に至れば、夜々粥を煮、鍋のまま熱に乗じて其の処に持たせて一人も残さずに施す。故に是を知って乞食共群居せり。

さて此の術、二代目子啓子までは異端の治法とそしられて、堂上に用いることなかりけるに、当代に至りて恭しく御医にぬき擯んでられ、今は雲上に行なわれる。其の精しきは其の門に謁して学ぶべし。手術は常に熟せざれば用をなさず。

さて唐にて産を論じたるは、別て臆説にて杜撰多し。本邦にては中条帯刀と云う人、婦人の療治に名あり。世に中条流と云い、其の書至って迂遠の事あり。薬方は世に多く用ゆるに効験ありと云う。中古戦国の時、産婦と金瘡を一樣に見なして同方を用いたること、此の中条流のみに非ず。昔時吉益流、浅見駿河守が家方、江州鷹見甚左衛門など皆戦場より仕覚えたる事と見ゆ。紅毛人の産を論じたるは皆実地にかけて其の図、子玄子の説と符合す。回生などには奇器も多し。よつ仍て思うに、腑わけと受胎の事などを論ずるは紅毛を第一とす。

腑わけは一、二度も見るべし。内景を知りて格別理解することあり。今は民人、太平の時に生まれて干戈（戦争）を見ざること二百年。故に文運大いに開けて、古に通ぜざる異国の文字も読み、自由に通用する事になり、諸名家輩出せり。暇あらば学び問ふべし。

唐にて腑わけのことは、前漢王莽が時に「粵嶠の蛮夷任貴、亦大守枚根を殺す。翟義の党、王孫慶を捕うるを得たり。莽、大医尚方をして巧屠と共に之を剝剥せしむ。五臓を量度し、竹筵を以て其の脈を導き、終始する所を知る。云う、以て病を治すべし」とあり分量などを見るは、唐の空理を好む学風より出て無益の事なり。内景を見るの意、其の所には非ず。

さて産乳の事に通ぜざれば、経閉と妊者を弁ずること能わず。大病に仕立てること多し。孕候を知らざるに属す頃、一婦嫁して後、経行来たらず。父母以て「娠ならん」なりと。一医をして診せしむ。飲食乏しく心気衰敗すれども悪阻なりとして省みず。漸く微寒熱を発し咳嗽して瘵疾になりてけり。是全く孕候を詳らかにせざる故なり。其の候悉く腹診にあり。詳らかに妊者の治法にかた（語）るべし。然れども産乳の事は賀川家に従って学ぶにしくはなし。

脈 論

脈は医門の大綱にて死生・吉凶を決するの根本なり。即ち四診の切の字なり。必ず病状を知るの具に非ず。『素問』・『難経』に其の論詳らかなれば熟読して知るべし。去りながら悪く泥めば一向に役に立たず。脈は至って初学には知れかねるものなり。猶更知れぬものと云う心得にて見ては更に用に立たずと云うほどの事なり。

『素問』に「脈の動静を切して、精明を視て、五色を察し、五臓の有余不足・六府の強弱・形の盛衰を観る。此れを以て参伍して死生の分を決すなり」。又云う「治の要極は色脈を失することなかれ。之を用いて惑わざるは治の大則なり」と云うにて考えれば、必ず脈ばかりにて察するものに限らず。脈と外候を参考して死生は決するものと知るべし。

さて四季の脈は弦・鉤・毛・石と四つなれども、初学の人にて知れることに非ず。況んや二十四脈に至ては益々繁くて並々のことに非ず。古人も夫れ故、七表八裏を分け、或いは六脈を以て平日の用に立てるの説なれども、つまる処が指三本の下にて一皮かむりてあるものを探るなれば、知りがたきも尤なり。

脈を取る專要と云うは、胃の氣を候うが專一なり。胃の氣なければ弦・鉤・毛 石も浮・沈・遲・數・滑・喬も死脈となる。『素問』に云う「平人の常氣は胃に稟く。胃は平人の常氣なり。人、胃氣無きを逆と曰う。逆なる者は死す」何れにも胃の氣たしかなれば、なかなか病人が急に死するものにてなし。

さて其の胃の氣と云うは形はなし。四季の脈は弦・鉤・毛・石と皆形をとけり。六脈も浮・沈・遲・數・滑・喬と皆形状あり。されども胃の氣なければ死脈なり。さすれば胃の氣と云うは形のなきものと云うこと知るべし。如何様の脈にても胃の氣が大切の見処なり。死生を決するの要務にして精神を指下に用いて脈を診すべし。何れにも脈を候うたきほど取りて、指を重くして骨に至る。是を『難經』にて腎脈の部とす。夫れを今一つ押ししてみれば、尺部に押し切られても関か寸の部に脈が響く、是を胃氣の脈と云う。脈の形は何れにもせよ押し切られて脈の通ぜざるが胃氣なしとす。是脈力の無きにて脈力は元氣の粹なり。乃ち胃氣と稱するものなり。其の脈の胃氣なきは猶更長病人ならば油断はならず。如何ほど病勢強く見ゆるとも、胃氣があれば手段は尽たると云うべからず。さて是も功を積まねば胃氣があるようにても無きこともあり、無きようにても有ることも有り。平日心を深く用いて平人の脈にて取り覚えるべし。是先君子清漣先生の教を奉ずる所にて、今に至って多試多驗なり。脾脈と云うも胃氣のことなり。脾胃ともに一同に論じてある。

『難經』に云う「呼は心、肺とに出る。吸は腎、肝とに入る。呼吸の間、脾は穀味を受けるなり。其の脈、中に在り」と云うを見て、「(人)一呼(脈)再動、一吸(脈亦)再動、呼吸定息、脈五動、閏するに大息を以てする」(『素問』平人氣象論篇)の大息を、中に在りと云う字面へかけて、脾の候なりと云うは悪しし。既に四臟は皆形を説き末に至りて脾は中州故其の脈中に在り、と云うにて大息のことにて無きことを知るべし。又十五難に「脾は中州なり。其の平和は得て見るべからず。衰はすなわち見るのみ」、是大息のことに非ず。又常に形のなきことも知るべし。「來ること雀の喙が如く、水の下漏が如く、是脾の衰るの見るるなり」。是脈のきざみ、一つ一つに切れて続かざるの形なり。胃氣あるは何ほど押し切りても押し切れぬ故、一つ一つになることなし。雀の喙すると水の漏るようにはならず。是胃の氣のなき故なることを知るべし。さて又胃氣の脈は和緩なるを指して云うなど云いし人もあり。又『素問』に四季の脈へ微の字を帯びて論じてある所もあれども、是は別に説あることなり。事ながければ爰に論ぜず。兎角胃の氣の脈に形はなし。『素問』にも「帝曰く、脾の善悪は得て見るべきか。岐伯曰く、善なる者は得て見るべからず。悪なる者は見るべし」と形のなきことを考え知るべし。

脈に打ち切れと云うありて、素人も知りて恐がる。去りながら一通りの打ち切れて死ぬものに非ず。積のある人か、老人の血液燥枯して、潤いのなき人には常にあることなり。脈許りにてもなし、一身の動氣が一樣に打ち切れるなり。成る程嫌なることなり。然れど

も驚くことにあらず。是は結脈とも促脈とも云う。結は緩脈の打切りなり、促は数脈の打切りなり。死脈のは非ず。『難経』には五十動にて一止するは一臓のかけたるとあれども、今病人を診るに、五、六動にて一止するか、七、八動、或いは一、二動にて一止するもの多し。『難経』の説なれば五臓の氣皆尽くしたりと云う所なれども、必ず病人死するに限らず。又今時の医者は五十動を診するほどは脈を取りて居らず。握ると思うと直ぐに放す。夫れ故七、八動の打ち切れも見つけぬことあり。真の打ち切れは古に代脈と云うものなり。代の字義によりて考えれば、かわると云う意なるべし。数脈が一止すると急に遅脈になり、大脈が一止すると乍ち細脈になるの類なるべし。是は大病人には折々有る事なり。是こそ死に近きと知るべし。されども傷寒論に云う代脈と云うにはかなわず、是は文にわけのあるるべし。初学の人、打ち切れに驚きて療治に臆することあり。よくよく心得べし。

三部にて病状を診得^{うかがい}るの法は、関前・寸部より脈の形すすんで魚際へのぼるほどに見ゆるは、上衝・頭痛・眼疾・耳鳴・眩暈の類とす。関部に悪く力があるか、脈の刻みが知りかねるの類は腹部のしつらいとなす。尺部の脈にかわりて尻はりなるは腰脚・足脛の病となす。左右は左右を分ける。是に心を用いて候^{うかがいまなび}学は大概はわかるものなり。

近来の流行にて、脈などの事に骨を折れるは見識の無きように成りたるは、古方家以来の弊なるべし。初学の輩は精神をこらして工夫をなすべし。されども脈ばかりみて他候にかまわぬ医者あり。夫れでも知れるならば勿論なれども恐らくは知れかねるならん。余は参伍しても洞見することならず。また前条に引証する通り、『素問』の診法にそむけり。

脈の虚脱して取りにくく様子も衰えて何から見ても大病と知れるあり。病人は一向のこと指して工夫も入らず。只恐るべきものは数脈なり。急卒の病に至って数ならば油断はならず。小児は勿論なり。驚証などになること数脈より変ず。大人とても数の甚だしきは急変を生ずることあり。得と胃気を候い外候へも参伍すべし。新病旧病の差別なし。去りながら熱あればいつにても数脈は表わすものなれば、よくよく精神を用いて取り得べし。さまでもなき熱を臆して治しそこねぬ心得すべし。又平日無病の人にて数脈なるは劳瘵の催しなるもの多し。

脈衰えて長病急病の別なく、頻りに大被を重く覚えて覆することならず。薄着にて臥することを好むは大切なり。極めて胃気を候すべし。絶えて有るもの多し。外見はよくとも油断すべからず。又肌は冷めて居ながら甚だ熱を覚えて、昼夜衣被を発開し覆することならぬものあり。冷汗などあり、四肢微冷する類、傷寒論の「病人身に大熱反って衣に近づくことを得んと欲するは、熱皮膚に在り、寒骨髓に在るなり。身大寒反って衣に近づくことを欲せざるは、寒皮膚に在り、熱骨髓に在るなり」と有れども後人の論説と見ゆる。仮寒真熱、仮熱真寒と医籍にあり。又活人書（『傷寒活人書』）に「先ず陽旦湯を与へ、後に

小柴胡を与ふ。先ず白虎を与へ、次に桂麻各半湯を与ふる」の説は空理を以て論じたるなり。是極虚の候にて長病の老人、小児の痢後、死に近しなどに多し。虚熱陰火などとも云うべきなり。脈形悪きは猶更なり。指を屈し死を期する悪候なり。

脈と証合わせぬは凶兆なれども、一定の看法に仕がたし。悪証にても脈より取りすぎりて療治することあり。此の時は証と脈の合わせぬを佳とす。又脈は悪けれども病形よろしき故、一手段つけて治すること日用の事なり。定法とすべからず。取捨に巧拙の入る所なり。

腹 候

腹部の見ようは呼吸の腹候応ずるを候うべし。急変のある病人は呼吸の応じよう、おだやかならず。次に動悸を候うべし。素問に云う「胃の大絡を名づけて虚里と曰う。膈を貫き肺を絡ひ、左の乳下に出づ。其の動衣に応ずるは脈の宗気なり」(其の動衣に応ずるの四字、馬玄台曰く、衍字なり。下文にて考えるに衍ならん)とあり、此の虚里の動甚だせわしく、高く手にあたるは悪証にて、猶更妊者などには甚だ忌むことなり。産後急証発することあり。又下文に「其の動衣に応ずるは宗気泄れるなり」とあるにて味わいみるべし。

去りながら世に黄胖と云う病は此の動甚だ高し。必ず悪証に非ず、勘弁すべし。是も偶記(『叢桂偶記』)に論じたり。さて詳らかなることは黄胖にて語るべし。又此の虚里の動ばかりにてかぎ(限)らず、腹部の動悸へ心を付けて候うべし。動悸に変があれば何病にても油断はならず、急変をなすことあり。小児は驚を発すること多し。又何ぞ痼疾のある人の動悸は常にかわ(変)ることもあるべし。是等は猶更に問・切と望・聞とを参伍して候^{うかがい}得るべし。

大小建中柴胡湯の類(大小の建中湯と、大小の柴胡湯の意味)、皆腹より方を付けるものなれば、腹候を油断すべからず。

腹の一体を候うの法は、腹の皮厚く肉ゆったりとして、肥人の股の如く皮と肉との分からぬを善とす。腹の皮薄くてうるおい(潤い)なく、肉と皮との離れて幾つと云うかず(数)もなく、筋の見えるは悪ししとす。腹勢を診すると云うは柔らかならず、こわからず、呼吸の応おだ(穩)やかに何れの処を按じて痛みこたえることのなきを、腹勢の良きとは云うなり。

腹の皮が薄く肉と離れて背につき肉は引っ張って、縫箔屋のわくに掛けたる絹の如くになりたるは津液うるおいのなき人の腹なり。癍囊・吐瀉・虚脱の人にあるものなり。極めて津液の尽きる腹は、皮浮き立ちて羽をむしりたる鳥の胸を撫でるが如し、極虚の凶候とす。此の手ざわりは、自汗強く死に近き人の、手足の肌にも有るものなり。又死人の肌を撫でて覚ゆべし。又多産の婦、腹皮肉にはな（離）れて浮きたるは常態なり。津液を以て見分け（る）べし。心下より痞鞭して板を按ずる如くに指も受け付けぬは難治多し。然れども甚だ怒りなどして鬱したる人、腹も斯の如くなることあり、是は難治ならず。又皮の離れて底の引っ張って、板の如く立筋多く見えて、任脈凹にてあるもの悪候にて勞瘵に多し。引っ張る故、呼吸せわしく脈も数なるものなり。臍下ドフドフと力無きは虚腹なり。

さて其の力の無き臍下を按じてみれば、沈んで動か（ぬ）塊がある、夫れを強く按ぜば臍の四方は勿論、五体へ響いて堪え難く痛むは虚なり。臍下はたわいもなきほど力なくとも、少しも按ぜば痛あり、これも虚に属す。関元・気海辺は大切を救う穴処になりてあるも理なり。総て上腹は大いにして痩せ、下腹は力なく処々に動気ありて、面色紅なる所なくば大病を催す候なり、むざとは療治ならず。長病の人、動悸へ手を当てても痛甚だかたきは極虚なり、難治なり。動悸の静なるは大病にても急死は無きものなり。

肥人の腹の形、胸肋よりムックリと高く、下腹に至るほど大きく軟なる腹あり。又心下はすきて下腹大きなるは、皆是を佳き腹と云う。瘦人の腹は胸肋より低く、小腹まで同じ形にて按ずるに軟なるは佳き腹なり。以上の腹は皆腹皮厚く、肉に離れずして潤いあり、動悸もなきものなり。

小児は心下高めにて少腹小なるものなり。人々腹形悪きと云えども、是は小児の常態なり。形は此の如くなることを先ず心得て腹候するに、病の半ばより腹形変じて背につき削りて去りたる如くに、胸肋よりは板の如くになりて横骨の所にて段々に高くなること悪候なり。疫にも痢にも一二日のうちに此の如くなること多し。難治となす。動悸など表れて至って悪しく見えるまで知らずにはすまず。此の如くならぬ前より腹診に熟すると、勢いの脱するは知る故、早く難治を極めて明に治すべし。五臓の積を分けて名もあれども（肝は肥氣、心は伏梁、脾は痞氣、肺は息賁、腎は奔豚とあり）必ず拘ることに非ず。古方家にて腹に拘攣こうれんと云うことを、芍薬の症（証）なりと口癖にする。是は伏梁と指すものなるべし。大概は乳下の通りよりつけねの処まで引き張り、臂ひじのようにある者、梁うつはりを伏せたる如くに見ゆると云う義なるべし。観臍の時、彼の伏梁と云うべきものを、段々と皮肉を割りて見れば、衆筋引きしまり聚まりたるにて、皮を割るに従ってみなみな緩みて異なるもの有るを見ず。皮の上よりは塊の如くに手にさわりて見えけるなり。拘急の腹は甘草、大棗、又芍薬の驗ある処なり。夫れにて急痛せば小建中湯の主る所なり。奔豚は腎積なりとあれども、動悸の上へ打ち上げるの形をたとえたるにて、其の動の甚だしきは、呼吸促

逼し或いは昏眩するに至る。又驚に発することもあり。必ず腎積とばかり一筋に心得ては、医学者の療治の下手になると云う処へあたる。『金匱要略』に其の病を四つありと云いてある。此の説解しかねれども、驚悸有りと云うものなどは頗る知るべし。『千金方』などにも奔豚と云うこと処々に出たり。猶委細は「積聚」の処にて語るべし。

何ほど脈数にて熱強く見ゆるとも、腹候して腹に熱のなきは押付けおっつけ（そのうち）さめる表熱なり。さて腹候のとき、手の平へチリチリと熱勢の見えるは伏したる熱にて容易にさめず。わけて小児の暴熱するは甚だ見わけかねる。ひきつけも有るべきや、どれほどのことにならんやと覚つかなく、脈にては知れかねるものなり。ことごとく腹候にて決知すべし。心下の真中まんなかに動悸もありて、手掌へチリチリと応ずるは油断すべからず。

水腫にもせよ脚気にもせよ心下に水気の見えぬは大事なし。心下から水気を催したらば油断はならぬ。病家へとくと云いきかせて療治せよ。わけても水腫は外見がよく見えるもの故、急変を知らずにいたると悪く唱えらるる。心下に蓄水ありて呼吸せわしきは急変の処に気を付け（る）べし。さて又水腫の証に咳嗽があるも、腹の動気強きも、脈に数のあるも悪証なり。脚気の衝心は心下と動気と呼吸と脈にて決知すべし。

虫積の候は心下にあり。内がやわ（柔）らかにてムックリと高く手を当ててみれば、どこともなく脹るようにて脹るにもあらず。掌の下にこ（凝）るかと云う気味にあるものなり。此の腹の人は虫積の外候備わりてあるものなり。外候の詳らかなることは「虫積」の時に語るべし。

腹の痞を按ぜば、水面に物を浮きたるようにて手に随いて移る。下して取れるものなりと思ふべからず。見える時もあり、又隠れる時もあり、全く塊もあり、又腸の脂膜切れて浮かみ出て、手にて按ぜばたわいもなく隠れる。皆悪候なり。脂膜の切れたることは「疝」の時に告ぐべし。又臍下に堅塊の処々へまわることあり。是はさして（原文は指して）かまいにならぬこともあるべし。悪くすると小便不利することあり、転胞の因になるあり。詳しくは其の時語らん。急の人、肋骨の動いて扇あおぐ如くなるもの悪候なり。急変あるもの多し。心下の真中に細（く）動悸のありて鳩尾へ打ち昇る人は快寝することならず。腹気上へばかり引きあ（上）げる故なり。彼の奔豚の意味あり。酸棗仁湯の茯苓の味、考え知るべし。さて積持ちの夜寝られんと云うは、空腹になるほど気がすんで寝られぬものなり。元来病（み）しき故に食の塩梅も常ならざれば、空腹になりたると意もつかぬものなり。其の大概をみて、是には臨臥に軽き茶漬けなどを食せしめると睡りを催す。腹気がじっと落ち着く故なり。

又小児の遺溺ねしやうべんするも腹気引き上がりて少腹の空虚になる故、遺弱するなり。大人も長夜になると度々小便に起きるは下冷する故なり、と云っておけれども、是も腹気の引き上

げる故なり。臨臥に餅か厚味の魚鳥の類を食すれば、其の夜起きず。小児の遺溺も厚味の食にて其の夜は止むものなり。是腹中実して腹気の引き上げぬ故なり。淡味にては早く消化する故、深更に至れば、睡中に空腹になりて腹の引き上がる故に頻数は止まず。又早起きして直に朝食を食することのならぬ人あり。是も積気のある人なり。寝口故に食のならぬと云えども、睡中に空腹になりて腹気引き上がりて積気の動く故、食事しにくし。昼も空腹をこらえ過ぎて、却って食事のならぬことあるものなり。やはり此の意味なり。静かに朝茶にても飲み、起歩する内に腹気も緩み食事がなる。終夜食せぬもの故、睡中に飢えゆるの理は諸の治療に考え合わせて助けになること多し。誰々も積持ちなれども、夜は快寝、或いは早起きしても食のなるなど一概に云う人とは談することならず。人の性によりて消化の厚薄もあり、大食すれば翌朝の飯は待ちかねるほど空腹になるを、昨夜腹を食い広げたる故なりと云うことあり。是は飽食にて睡中に空腹にならず、腹気実して醒める故に翌朝よきほどの腹の塩梅故、飯のうまく食えるなり。

さて又動悸あれば上づりに成るものと知るべし。上逆して耳のドンドンと鳴ると云うなどは、やはり動脈の耳中にて打つ響きなり。心下の悸ある人は眩暈するものなり。凡^{つくえ}上にて書き物して、俄に立ち上がれば昏倒するは肩のつかえたるもあれども、先ずは動悸の急に立ち上がりたる故に、一際^{ひときわ}激しく心下に逼りたるなり。早く心下を按ぜば昏倒せず。子玄子の禁暈術の意を解すべし。又奔豚気の味も知るべし。心下に言ぶんのあるは、多くは気を塞ぐ故に、或いは立ちくらみなどして、気を失うこともあり、苓桂朮甘湯の意味知るべし。

腸癰は腹候にて決するものなり。臍下少腹の辺に塊ありて、指も付けることならぬ程痛み、皮膚甲錯すると潤いなくサラサラとなりて腹痛はげ（激）しく腹内雷鳴して、徳利より水にてもこぼす如くの音もあり。又杓にて水汲みかえす如くの音のするは是膿を作したるなり。さて指を付けても痛むと云うもの、常に積にもあれども、腫物の膿を持つと云う処へさわるものなれば、痛む様子も按じた処もわかるものなり。半産に多し。産後と食傷の後、腹痛するは油断すべからず、度々ある病気なり。膿血を下してから腸癰なりと云ては医者の見識はなきなり。猶詳らかなることは「腸癰」の時に語らん。

塊物を下す事至って手際の入ることなり。又大事のことなり。大概は下らぬものなり。又自ら下ることはあるべし。塊物の臍以上にあるは益^{ますます}くだ（下）り難し。婦人の塊下りやすし。撃つても攻めても動かぬ塊は必ず強く長戦はならず、命までを攻め殺すなり。大積・大聚は侵すべからずと古も言えり。夫れ故害をなさずば大概はこらえて無理に療治すべからず。

妊娠の見ようは腹候第一なり。子玄子の『産論』並びに『産論翼』に詳らかなれども、賀川家に親炙して学ぶべし。委しくは猶「婦人」の病論に詳らかに語らん。さて心得の一条

は、病にての経閉は不順の至り、瘀血の為すことなれば腹にも云分あるべきに、腹候に心にかかるほどの悪候もなく常に不順にもなき、経水の滞りたらば妊娠なりと知るべし。二ヵ月目にては知れかねるも多し。又崩漏・脱血の後、娠むこと『産論』にもある通り、時々あることなれば心を用いて兼日のことを尋問して参伍すべし。

常に腹の鳴りて下りやすき人、動悸もありて胸膈に痞えて心下うるさく、気を塞ぎ、肋骨の下通りを按ぜば腰の方へ響くは疝気なり。さて疝積はいろいろの証に見ゆるものなり。気を塞ぐ人は気を付けて参伍すべし。疝積多し。旧腹痛も旧痢も水腫にも疝を療じて功を得ること数々有り、疝は人々にあるものと知るべし。

手足の不自由か、引きつるなどの類は皆腹に根本の塊物あるものなり。左にあれば左悪しく右にあれば右悪し。必ず手足へ目を付けては治せず、腹部にて病根を除くべし。中風は全く此の因より発す故に、名義は『叢桂偶記』に詳らかにすれば読みて知るべし。中風の腹より発すると云うことは『素問』に「岐伯曰く病、伏梁と名づく、此れ風根なり」とあるは即ち此の意味なり。

水腫の腹満したるに臍の凸に出ることあり、凶候なり。腹満・鼓脹にも凸出することあり。臍を按じてみれば、あちらこちらへ移るなり、又悪候なり。また小児の啼泣するもの凸出するは、その啼泣するの因を極めて夫れをさえ治せば臍は低くなるものなり。夫れ故小児には凶候とせず。

水腫にも脚気は猶更心下より水気を催すもの故に、心下を候えば未病を治すと云うほどに早く知るなり。是は数人を見て、指下に水気の手ざわりを覚えるを第一の要とす。腹は衣被の中にて候いするもの故、眼（に）みるべからず、又腹の水気、初起は按じたる跡は皮下につくのみにて、手足の様にありありと窪くは見えず。此の事を知りて候すべし。

婦人は肌到手のつくことを嫌う故、医も亦是を憚りて衣を隔てて候するときは知ること能わず。高貴の人は猶更此の行いありて腹候自由ならず。故に弁胎などには甚だ誤ることあり。左右に報して衣を隔てずに候すべし。又初起の時、脚脛の内通りの骨上を按じて其の跡を指にて撫でれば、肉に指跡窪んであるなり。目にて見ゆるまで知らずには医と云わんや。手馴れるれば指を下せば手ざわりにて知るなり、撫でて見るに及ばず。然れども初心にては知れざるものなり。精神を用いて診候すべし。暗夜に脈を診しても寸口に水気もちたる肌は手ざわりにて知るものなり。白日には三指の跡、三部に窪んで見えるもの故、病者の手を引き込むのとき心をつけて見つけて用に立ちたることも数々なり。

察 色

扁鵲伝に「病の応は大表に見る」とて、察色大切の見所、証候を知る所なり。四診の望の字なり。顔色・声音・呼吸は定まりたることは余も知らざれども、診察の一にて、人相者は一生の吉凶も云うことなり。さすれば見所多きものと知るべし。さて病人に対したる初日に、一々に心を付けて見て置くべし。夫れより後に変のある時は、初日の診と比べて見ると甚だ心得になることあるものなり。顔色も赤きは上逆、唇の白きは凶兆なるは俗人も知れる所なり。たとえば其の赤と白を得ると見て置けば、前よりよ（良）きか悪きかと、後に計り知ることなる。度々心を付けて見れば、後には熱の伏したる顔色も、又狂騒するも、快を得るも、死に近きも知るべし。又眼中にてみ（見）えることもあるものなり。平人の喜怒の色は誰も知れる。病人も色は猶更心を用ゆるならば何ぞ知れざらん。『医種子』に載りたる察色の法を見て、古人の察色を論じること此の如きを知るべし。

嘗て桓公、諸侯を令することを讀むに、「衛人後れて至る。公朝して管仲と衛を伐たんと謀る。退朝して奥へ入れり。衛姫君を望見して、堂を下りて再拝して衛君の罪を請う。公の曰く、吾が衛に於いて故なし、子何ぞ請うことをする。曰く、妾、君の入りたまうを望むに、足高く気強し。国を伐つの志あり。妾を見て動く色あるは、衛を伐つなり」と申しける。「明日公朝して管仲を揖して進ましむ。管仲曰く、君は衛を捨てたまうか。公の曰く、仲父何ぞこれを知れる。仲曰く、君の朝に揖するや恭して言を出したまうに、往々臣を見て慙づる色あり。臣ここを以て知れりと」

此の二人は心を専らにして桓公に事える故に、其の容貌を見て、其の用捨を知れり。若し能く心を病者に専らにしなければ、一望して其の病の深遠自然に知るべし。又季札が樂を聞きて言う所も、聞法の一義なりといえり。

声音は力の脱たるは早く知れる所なり。肺癰は声音にてよく知れることあり。肺痿は猶更なり。ひしげたようにて、さびのある声になり咳嗽までひしげた様になるものなり。麻疹の咳はよく肺癰に似たり。小児の痢病などの、日を経て脱したるは泣き声かなぎり高く細くなるもの凶候なり。

気急する病人、呼吸につれて小鼻の動くは久病ならば死に近し。久病ならずとも安からぬことと思ふべし。是を鼻扇と云うなり。

爪の色も見所なり。青は寒、紫は瘀血など論ず。黄胖は爪の色潤沢ならず。或いは条理高く垢つき、或いは碎けて長ぜず、或いは厚くなりてへげる、或いは薄くなりて反りてか

(欠) けるものなり。又黄疸は眼中と爪甲より、早く見ゆるもの多し。皮膚の覆うもの無き故に透明して早く黄の見ゆるなり。爪は骨のようなれども条理ありて津液ここに通ず。怪我して強く爪を打つと瘀血条理に結して染まる如く。爪をはさむ時に小口こぐちより見て、血も打ちためて凝りたるは知るべし。

勞瘵に桃花蛙と云うことあり。『証治要訣』に云う「面色故の如く、肌体自ら充ち、外看無病の如き有り。内は虚損す。俗に桃花蛙と呼ぶ。新に粧う者の如し」。

顔色良ろしきとて悦ぶことに非ず。決して死を免がれず。又惣身顔色ともに瘦せて両顴ほおほねばかり赤くして粧えたるが如く見ゆるを帯桃花と云う。勞瘵に多くあらわれ、婦人・鼓脹にも有る候なり。何れも同じく難治なり。『外台（秘要）』に云うたる、崔氏方の五蒸を治するの処に「嗽後面色白く、両頬赤を見わことす臙脂色の如し。団々として錢許せんかりの大きさ如く、左に臥すれば即ち右に出る。唇口常の鮮赤あかすぎるに非ず。若し至って鮮赤あかすぎるなれば即ち極めて重し。十なれば則ち七は死に、三は活く。」とあり、今は医の拙なきにや十に一生なし。

口眼喎斜するは中風にある証なれども、壮年の人の手足も滞る所なく俄に口眼喎斜するはやはり中風の一証をあらわせるなり。何の事もなく中風の薬にてよし。其の壮実をたのんで酒色過度の人、老来にて発する中風を取り越えて発したる故、諸証具せずに一証を表わせしなり。

癩風も口眼喎斜する者あり。肉色を見て麻木を尋ぬべし。中風と違い一ヶ所ずつに血の凝って不仁ひとはたならずする者、其の処血色を察すべし。中風と異なり、又毛髪けの脱落するや否やをも察すべし。

痘は全く察色に在り。其の発する部分ぶわけを以て云うは信ずべかざるに似たり。痘の多くは凶、痘の少なきは吉と云うは天下の知る所なれども、潤沢と乾枯とに吉凶あり。紅鮮と紫黒とに吉凶ありて多少に非ず。然れども少なきものは凶候の出るは稀なり。悉くは痘瘡門にて語るべし。

狐つきは望んで知るべし。然れども狐に上下あり、上狐の憑きたるはまぎ紛れやすし。巫祝の言に云う、十三種ありて天狐・地狐・黒狐・白狐など云うは甚だ奇異なるよし。野狐は自分より口ばしりて、稻荷なり、赤豆飯を喰わせしめよ、などと云うにてこれを医門に託せず、直に祈祷にかかると。又十三種の内の上狐に憑かれたるは祈祷も何も構わず病人と見ゆるあり。是を医者さかいに託す。医者も又物憑きか乱心かの堺知れかぬるものなり。中にも乱心かと思えば、本心も所もあり、狐付憑きかと思えば、乱心のようにも見えて、一日の中にも色々になる。夜寝かね或いは死せんと欲する真似をして看病人を疲らか

すものなり。病人も意氣を得と見て熟察すべし。能（く）氣をつけて見んとすれば、病人嫌がるは乱心には少なし。又巫祝の風折と称するあり。これは益々見わけ悪し。是は常に憑きては居らぬものにて、ちらりちらりと風に誘われたる如くなるよし。

予嘗て巫祝の功者なるに問い求めたるに、彼の教えを後に試みるに助けになりたること多し。食事をする所を氣を付けて見るべし。口もと常ならず、或は大食になる人もあり、或は食事をするに奴婢の外は人を近づげざるものあり。兎角愚人を相手に仕たがるか、総て食事に変りあるものなり。相對して座したる時、眞向に眼と眼を見合わせかね、必ず面を背け、或いは面を伏して両膝へ手をつき、肩をすぼめすくみたるようにて面を挙げざるは決して乱心に非ず。又腋下へ手を着させず、後へも人を廻さぬものなり。此の外に四診有りと云う、秘して伝えず。予嘗て試みるに又印堂ムックリと高くなりてある時もあり。氣の凝りたるなるべし。夫れを堅く押さゆれば手足の力抜けるものなり。又背を下より逆に撫でれば大いに怒るものなり。

さて治は灸治よし、鍼もよし、紫円も効あるものなり。烏頭・瓜蒂も効はあらんと思えども未だ試みず。又大奇事あり、袂のうちに沢山の毛あることは皆人の知る所なれども、病家の味噌桶の下を見るべし。衣服へついてある毛と同様の毛あるものなり。能く利害を説いて聞きすれば、鍼灸にも及ばず治するものあり。治せずば斯の如き的手段にせんと云うこと兼ねて心得て有る故に、其の術に恐れて治するなれば攻め道具の用意なしには利害ばかりにては治すまじ。

子啓子嘗て狐憑きを落とす鍼法を伝えられたり。子啓子は相對したるばかりにて鍼を刺したることなく験ありしよし。其の法は手の左右の大拇指の爪甲をこよりにて堅く縛り、腋下か背後に凝りたるものを力まかせに肘臂の方へ段々にひしぎ出し、肘まで出たる時、他の腰帶の類にて緊しめ、其の凝りたる塊の上へ鋒鍼にて存分に刺すべし、治するなり。其のひしぎ出す時、並々のことにては狂躁する故、人を雇って総身をかくるる処なきように尋ねてひしぎ出すべし。此の伝を得手後に東門先生へ物語れば、足の大拇指も縛すべし。病人の氣を飲むように張り合いつけ（る）べし。若し向に飲まるる時は何ほどにしても治せず。陰鍼にて狐憑きの落ちると云うは、此の術なりとありけり。余は刺鍼を解さざる故、他にも鍼家に術ありや否（や）を知らず。灸法薬方も『千金方』などに詳らかに見えたり。十三鬼穴など是なり。仲景の狐惑病は狐憑きのことには非ず。『（叢桂）偶記』に論じ置たり。狐憑きは邪崇と云うものなるに、俗医狐惑病と覺えたるを時々聞きて笑うべき事と思いに、入門（『医学入門』）に狐憑きを狐惑と書きたる所あり。仍てはめったに笑われぬものなり。

頃南総の名医、津田玄仙子の『経験筆記』を読むに、狐狸秘訣と云う処に曰く「狐憑

きは人中の紋ゆがむ○喉に×此の通りの紋を生ず○腋の下に動悸あり○手の大指をかくす○脈両方背けて齊わず忽ち変ず」。右五証の内一つ二つもあらば狐託つぎのせんき（先規）肝要なり。巴黄雄姜湯を用いて、其の精液を下す。巴黄雄姜湯方、巴豆・大黄・雄黄・乾姜各等分、右四味細末（に）して一錢ほど湯にて用うべし。大便瀉下するを以て効ありとす。若し治せずんば又三日ばかり間をおいて用うべし。必ず愈ゆるなり。後安神散の類を用いて補うべし。

詐病けびょうを見つけずに拙と唱えらるることあり。元来奴婢などの主人を偽り、病に託するほどの下賤たる人に多ければ、其の智も亦上等の人を欺くべからずと雖も、姦智巧偽の者は頗る本病に似るものあり。是は四診にてたちまち乍に見分けるべし。猶又、師到れば壁に向かうなど古人の云う所の如く、不正の心事正人に対しかねること彼の狐憑きの如し。『傷寒論』平脈法に曰く「設し壁に向かいて臥し、師の到れるを聞きても驚起せずして盼視し、若しくは三言三止す。之を脈するに唾を嚙む者は此れ詐病なり。設令脈自ら和する処なれば、此の病大いに重しと言ひ、当にすべから須く吐下の薬を服さしめ、鍼灸数十百処すべし、乃ち愈ゆ。（『醫燈續焰』に曰く其の詐を嚇（する）也と）」とあり。余は肘上を縛して脈を閉じたる体にしたるを見たることあり。眼中爽やかにて言辞度を失すること多きを以て診したりき。

病 因

病因とは、その病の起こる所の根本なり。其の本を治すれば他はひとりに良くなる。随分と念を入れて問（う）べし。即（ち）四診の問の字なり。病因と外証を合わせて方は処すべし。是『素問』に標本と称するものなり。去りながら病因にかかわらず見証にて治すこともあり。是は時宜しきに従うにて、何病にもせよ急卒に倒れて手足厥冷すれば四逆湯なり。是外証にて方を付けねばならぬ病なり。沈痾・痼癖に至りては、病因を極めて外証にてまじ参え考えれば、内因も符節の如くに合するものなり。かくなりたる時は死生を指すこと掌中にあり。又外証に主客の差別あり。是を主証・兼証とす。さて病を問うに何のかま構にならぬ所（全然問題にならない所の意）を因にとると、方を付けて驗もなし。総て工（巧）拙は此処に違いのある事なり。長病・痼疾ほど因をとらねば治すことならず。例えば先年下疳を病わづらいたると云はば病因となるの心なり。婦人は第一に経行を問うべし。瘀血も因に属するもの、十に八、九なり。腰背疼痛、手足拘攣などは瘀血によるなり。其の因の尋ねよう（原文はたつ子様）、粗末（原文は疎末）なれば奇驗をとり難し。他日人によりて病癖もあり。大層になり騒ぐ癖もあり。又一向に苦痛の事は物語らぬ人もあり。又医師の工（巧）拙を見ようと隠して見せる人もあり。

是は蘇東坡曰く「疾有るに至って、療を求むは必ず先に悉く告げるに患る所を以てす。而して後、診を求めばすなわち医了然として患の至る所を知るなり」と。東坡の流、至極よし。さまでのことにもあらねども病因隠れたるは知れ難きことあり。

天明丁未、元旦早朝する時、小吏医師を連れて馳行を見る。急病人やあると出仕して聞けば、富田總裁七十に近き人なりけるが、廟堂に於いて急病なるにより、同僚も三人有司の命にて行たりと云。同僚も一同かえりきたり帰来て席につけば、一席の諸士何病にて如何なりと尋ね問うに、何か苦痛強く、起き上がり起き上がりするを、ようやく脈を見たりと云う人もあり。中寒などにてあらんかと云う人もあり。中気の気味にもあらんか涎を流したりと云う人もあり。決定して病証を言い切りたる人なし。余心に「拙き見様かな、何ぞ主証と定まるものありそうなもの」と思いけれども、其のままにて朝礼もすみて退出せり。富田が嫡男、人を馳て曰く、「かりに最寄りの由緒へ引き取れば一診を乞う」と云うにまかせ往きて診するに、なるほど先に見たる人々の名を付けかねたるも尤もにて、いかにも知りかねる。朝衣のままにて炬燵へ臥して微にうなるばかりにて挨拶もなし。脈は洪大にて数を帯び、頭より自汗出て手足逆冷す。中気のように見ゆれども、手足は痿たるとも見えず欠（厥）もせず。中寒と云いしも無理ならず、腹を按ずるに満して痛むとみえて、中脘の辺へ指をつければ顔をしかめ眼中は常の通りなり。営中にて服薬したるに吐逆して受けざるのみならず、時々嘔（吐）くことありと。薬を飲むと皆吐逆したりと云うに因って前夜の様子を委しく問えば、出仕前に魚味にて酒を飲んだりと云う。其の魚に子もありしよし、沢山（食）たりと云う。さては宿食なり、酔後寒を受けたるばかりならずと中正湯を煎服す。何事もなく飲んだり。二便あらば苦痛も退かんと思えども、衰老故心元（こころもと）無く、晡時（日暮れ時）に又診すれば小便通じて腹痛半を減ず。病人も少しは挨拶もある。其の夜、大便通じて明日に至れば床に座す位になり、三、四貼にて全快したり。是は因にばかり依って治したり。

又疝気のある人は其の疝の証候隠れて見えざることあり。診法を精しくして沈疝を治すこと度々なり。病因は疎かにすべからず。水腫・痢病・吐食・反胃・氣癖などに疝の因なること有り。

南風が吹くか雨にても催すと云う日より（天気）といえは、頭痛して上衝する人あり。桂枝の証か芎黄散の証か加味逍遥散かと云う病人は其の因は虫積なり、婦人にあれば、胡乱に血の道として治すれども、是は芫凶湯にて虻虫を下せば再発せぬものなり。病因のこ（かり）とは万病に入用なり。

紀藩の士、十三歳なりとぞ。安永甲午の年、京都にて通し矢を仕たりけるが、極めて秀たる事にてありき。少し不快のことありて同盟藤岡氏なるもの療を乞うに、虫積の候あ

る故に芟凶湯を与えて其の病愈たり。此の人、矢数をかけると左の肩、隠々と痛みたることありき。虻虫を下して後、肩も痛みを忘れたりとなり、虫積の害をなすこと思いもよらぬ事あり。芟凶湯を用いて知るべし。然れども虫積を見分誤れば無益の薬なり。眼病にも、痢病・瘡・水腫の類にも病因は虫積なるときあり、心を用いて診すべきなり。

主 客

凡^{およそ}の病を治するに先ず病因をたずね、其の後主証と兼証とを分け（る）べし。主客見えねば薬は効かず、其の分けようにて病名のつけようも違うなり。是其の医者の見立てにて工（巧）拙のわかる処にて、眼のつけどころ第一なり。悪く心得ると主客の差別もなく、うかとして薬を与るものあり。たとえば頭痛もすれば咳も出る痰もはると云う時は、桂枝湯も麻黄湯も又小青竜湯も参蘇飲も芎黄散も敗毒散のようなものは皆用いて適せずといわず、人々の心得て用いた所が何れでも治す。是は元来引風が主証故、発散すれば外邪の氣去りて彼の兼証の咳も頭痛も治するなり。是に悪しく飲み込むと、方は何れにても良き事も思^{おおいにひ}うは大非なり。

其の主証は軽邪なれば薬にてなくとも（なくても）、温^{うどん}麵にても生姜酒にても一汗して治す。引風の病人を見合いにして、大病にても何方にてもすむと取りさわぎをするは不案内より起きたるなり。初^{はじめ}の邪氣が強ければ、うかうかとしている内に大病になる。主客の証、見えねば一方にては主治不足な様になるは筋を飲み込まぬなり。方は短味を貴ぶ。一味の分量多き故、其の氣強し。多味なれば七に少しばかりをかける故、何ほどの神品にても其の力豈に強からんや。欲心深く加減と云えども、減はせずに加ばかりして本方の薬味よりも加味多くなる有り。全く主客の見えぬ人のする所にて、是を大損と云う。

さて主客のとりように付いて一つの話あり、夏日、奥州白川郡渡瀬村の農民の娘、産をしたりけるが時々寒熱ありて大汗流れる如く、遥かに予を迎う。因って官に乞いて宿を経て行きて治す。豪農なれば医者大勢集まりて、衣被沢山着せて大事にかけて戸障子も閉じて、独参湯と大補湯にて数日を連服すといえども、大汗二、三日に一発し、少しずつの汗は毎日なり。予脈を診するに浮散数、産後血熱の常体なり。飲食乏しく傍人の騒ぎ強き故、当人も必死の氣になりて甚だ衰えたる様なり。医生等曰く、汗多く陽亡きは恐るべきの第一にて、頻りに参耆の効を頼めども、自汗多く衣被も二、三度ずつも着替えるに猶^{しゅん}滲（滲）すと云う。予病家へ告げて曰く、「着服多く戸障子も閉じたれば、温熱の時節に余り鬱して

悪しし、平日通りに少し心を付けて取り扱ってよし。氣力益々衰えるなれば、よき程にすべし。以来は汗も出まじ」と言い含めたれば、医生等予が高言吐いたりと思しや詰り問ふ（詰問した）。予曰く「公等は兼証を治せし故に治することはなし。自汗ばかりが風と（ただ急に）発するならば、公等の主方通りてよきことならんが、先ず寒熱が来てから汗を発するは、汗は兼証にて寒熱が主証なり。寒熱をさえ取れば汗は出ずべきはずなし。是主客の証の取り違えなり。極めて知る、此の婦人は産後壯健をたのみて保護の仕方悪くして此の証を発したらん」と云えば、家人皆曰く「平産故にあまり用心もせざりけるが、一日悪寒戦慄して此の如くになりたり」と語る（原文はカタル）。産後二、三日を経て発熱するは血氣も新たに動きて、未だ落ち着かぬ処へ外より動かす故に、件の如き証を発するもの多し。即ち柴胡桂枝湯を作りて飲ましむ。二宿逗留する中、起色を得て、是より寒熱来たらず。寒熱なき故、発汗もなく全快したり。主客の見分けようにて病人を不治の郷へ案内して引き込むようになることあり。

又産後二、三日を過ぎて、血暈を發するものは必ず乳汁出ず、其の熱も解しかねること、当座に發暈するよりも悪しきものなり。